

ハタチのキモチ

平成27年度町成人式は、8月15日に平泉文化遺産センターで執り行われ、色鮮やかなドレスや真新しいスーツなどに身を包んだ75人の新成人たちが、希望や期待を胸に会場に集いました。会場では久しぶりの仲間との再会に歓喜の声が絶えず、懐かしい顔を見つけては写真を撮り合ったり、昔を振り返りながら旧交を温め合う様子が多く見られました。

式典には青木町長をはじめ、多くの来賓が新たな門出を祝いに駆け付け、祝福の言葉で新成人を激励しました。式典終了後のアトラクションでは、新成人が互いの近況を発表。学生時代の恩師5人も登壇し、当時の笑話を交えながら、立派に成長した教え子たちの今後に期待し、エールを送りました。

今回は、大人への一歩を踏み出し、町や日本の次代を担う新成人たちの表情や今後の思いを紹介します。



成人式の由来

成人の日は、新成人が両親や周囲の大人たちに保護されてきた子ども時代を終え、自立し、大人の社会へ仲間入りすることを自覚するための儀式(成人式)を行う日です。

成人を祝う風習は古来から存在していました。それが「元服」と呼ばれる儀式です。主に16歳の男子がそれまでの髪型や服装を子どもから大人へと改め、成人したことを周囲に示しました。女子の場合は元服はありませんでしたが、それとは別の「裳着」と呼ばれる儀式で大人の仲間入りをしていました。昔は男女とも十代半ばで成人を迎えていたと言われていました。

このように、古来より子どもが大人の仲間入りをする儀式は特にめでたいこととされており、「冠婚葬祭」の「冠」はこの特別な通過儀礼を指す言葉になっています。

20歳が成人という考え方は意外にも歴史が浅く、現在のスタイルで成人式が行われるようになったのは戦後であり、1948年の「国民の祝日に関する法律」によって「成人の日」が正式な祝日と制定されて以降、全国的に広がりました。

町成人式の現状

直近10年間の町における新成人の対象者数は、平成18年度の120人をピークに年々減少の一途をたどっています。今年度と18年度の対象者数を比較すると約2割も減っていることがわかります。

また出席率については、80%以上という水準を保ってきていますが、21・22年度には70%近くまで落ち込みました。しかし東日本大震災直後の成人式(23年度)では84.1%に上昇し、例年よりも高い出席率となりました。震災の影響により、友人との絆の大切さや、故郷に対する特別な思いを再認識したものとされています。

年度	対象者数	出席者数	出席率
18年度	120人	98人	81.7%
19年度	115人	95人	82.6%
20年度	108人	88人	81.5%
21年度	95人	71人	71.7%
22年度	96人	70人	72.9%
23年度	88人	74人	84.1%
24年度	90人	73人	81.1%
25年度	98人	79人	80.6%
26年度	82人	68人	82.9%
27年度	95人	75人	78.9%

直近10年間の町成人式出席率

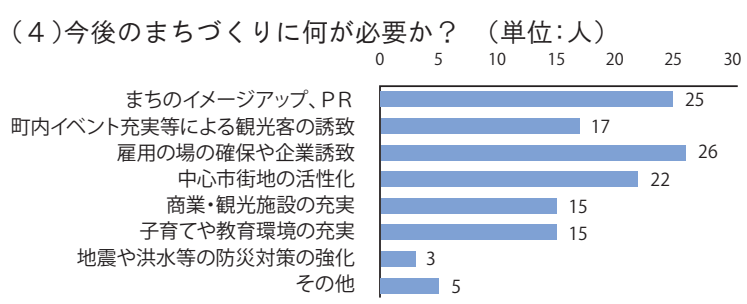
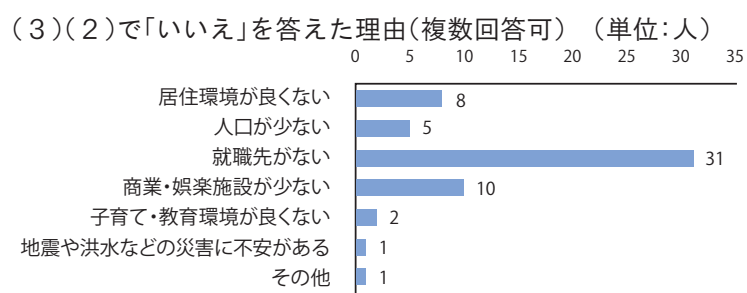
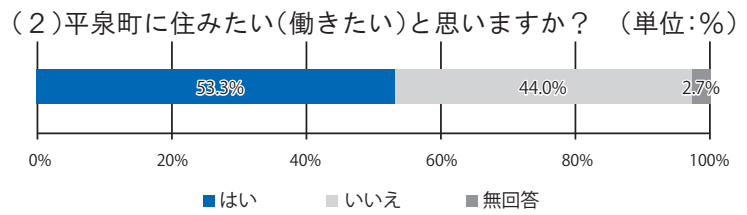
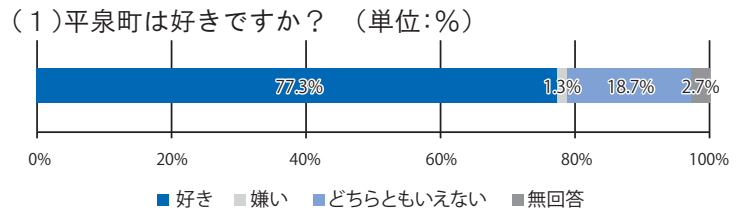
アンケート結果

8月15日の成人式にて、新成人の町に関する意識調査をするため、「新成人に対するアンケート」を実施しました。

まず「平泉町は好きですか」の問いでは、77.3%の人が「好き」、1.3%の人が「嫌い」、18.7%の人が「どちらともいえない」と答えました。

次に「平泉町に住みたい(働きたい)と思いますか」の問いで

「新成人に対するアンケート」 調査結果(回答者数:75人)



は、53.3%の人が「はい」、44.0%の人が「いいえ」と答えました。このことから平泉町は好きだが、住みたい、働きたいとは考えていない人が多くいることがわかります。

また「平泉町に住みたい(働きたい)と思わなかった理由」の項目を見ると、「就職先がない」と答えた人が31人、「商業・娯楽施設が少ない」が10人、「居住環境が良くない」が8人などとなっています。

「今後のまちづくりに何が必要か」の項目では、26人が「雇用の場の確保や企業誘致」、25人が「まちのイメージアップ、PR」、22人が「中心市街地の活性化」などと答えています。

これからのまちづくりに、新しい発想と行動力を持つ若いエネルギーが必要不可欠です。だからこそ地元を愛している若い人たちがここに住みたいと思える環境づくりを行うことが求められています。